



同志社の学生運動

〈出席者〉

(文学部教授)

小倉 襄 二

(神学部助教授)

高 道 基

(大学宗教部主事)

笠 原 芳 光

(大学会館事務室主任)

河 野 仁 昭

(商業高校教諭)

〈司 会〉 平 林 一

*

平林 それでは、座談会を始めることにいたします。最近、日本だけじゃなくて、諸外国を含めて、学生運動は一九六〇年代の非常にアクチュアルな問題となってきたております。ですから、日本において、学生運動というのはジャーナリズムの世界では一つの好材料という形で取り上げられているし、今本屋へ行くと、全学連ないし学生運動に関する本がかなり並んでいるという状態である。それからアカデミズムの世界においては、これは一つの衝撃となり、いわば大学のあり方というものもが根本的に検討をせまられることになってきました。

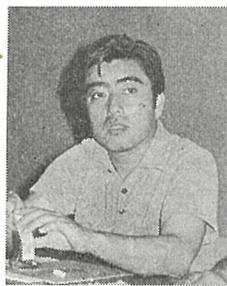
学生運動はいわゆる七〇年の安保問題をひかえて、最近特にその激しさを加え、全国多くの大学で紛争を生じているわけですが、同志社大学もその例外ではなく、学長選挙、授業料値上げ、学館管理権、寮の光熱費負担の問題等について、その対策に苦慮しているわけです。学生の要求は現象として、右のような形を取っておりますが、その目指すところは大学の自治、教育制度全般および政治体制

にもつながら重要な問題を含んでいるわけです。そこでこの際、戦後二十年にわたる学生運動の理論と実践の変遷のあとを、たどりながら、現在の学生運動の状況と問題点を明確にするとともに、特に同志社の状況を出来るだけ正しく把握してみようというのが、この座談会の意図であるわけです。たとえば最近では六月四日に学内で暴力事件があった。そこで、同志社に動いている教員としてそういう問題にどう対処し、どう考えるかという問題があるわけです。そこでは、言い古された自治とか、あるいは暴力否定とかいうことだけでは、やはりなかなか解決しない問題がある。特に日本の知的状況というものは、どちらかと言えばいつも主格の不在というようなことを行なう伝統的要素がある。その中で、やはり現実起こっている問題をどうするかということが、非常に大きな問題としてあるわけです。ただ時間の経過のなかで、やがてまた、その波がおさまるだろうという問題ではないと思うわけです。そこで、ここでは同志社に動いている人間の自己反省を含めて考えていただきたいわけです。

安保以前の学生運動

平林 最初に、現在の学生運動の状況と問題点を明確にするために、安保以前の同志社の学生運動の問題点を小倉さんに語っていただきたいと思います。

小倉 そうですね。二十年の経過の中で同志社の学生運動の流れを時間的系列を追って論ずるということは、なかなか難しいのですけれども、戦争直後の学生運動の形はよく言われるような民主化闘争と言われている流れがあったわけで、その中に国公立大学あるいは旧制高校などにおいて、いわゆる戦争協力者に対する追放運動であるとか、あるいは陸海軍の軍人の復員による入学反対闘争をやる



小倉 襄治氏

かという形で、特に戦争の非常にするどい被害感覚からする民主化闘争というのが展開したわけですね。

その時に同志社では一つの意見があったわけ
です。それは湯浅八郎さんが昭和二十一年八月、八年ぶりに亡命さきのアメリカから帰ったわけですが、湯浅さんを総長に迎えるという形で一つの運動があったわけですね。これは、アメリカ・デモクラシーの一種のシンボルをかついだという感じもあるわけです。ところが急速な日本の民主化の流れの中で湯浅さん自身、二十四年八月に学内政治活動禁止令を出した。民主化闘争の流れの中で湯浅さんの位置というのがズレちゃって学生がそれに反対をして湯浅さんを追放するというか追い出したという形になるのでですね。また当時京都に、京都学生同盟というのがあって、そこに同志社の学生組織も参加していたわけです。

いま同志社では学長選挙問題が起こっておりますけれども、これもすでに、昭和二十四年湯浅総長の辞任に伴い次期の総長を選ぶ時に、総長と学長の分離問題が起こったわけですね。その時に学生がやはり学長選挙に参加させよといった要求がありまして、それが十九年まで持ちこたれて、そこで現在の争点である学生の選挙への参加ということが、決まったという事情もあるわけです。

これも民主化闘争の流れだと思えますけれども、具体的にはその前後に、たとえば昭和二十三年の教育復興闘争とか、二十四年における全学連の結成の問題、国公立を含む授業料値上げ反対闘争、こういう特にアメリカの占領政策下におけるところの大学の管理体制への一つの施策とこれに対する反対運動の系列があります。

また私学関係だけの学生組織がつけられたり、その次にくる問題としては、全国的な問題ですけれどもイールズ声明反対闘争とかレッドパージ粉砕闘争が二十五年にかけて起こってくるわけです。二十七年の段階においては破防法反対運動ですね。これは特に関西——同志社なんかが中心になって動いたわけで、これは学生大会、教授会なども率先して反対の声明を出して、関西では同志社が破防法反対闘争の口火を切って、京都における相当広範な戦いの中心になったということもあります。それから同じ二十七年九月には、ここにおられる河野さんなんかも関係しておられるわけですけれども、今の学生会館問題のはしりみたいなものですが、学館経営をめぐる学生側の管理権であるとか、学生の側の



平 林 一 氏

主張をめぐる運動があったと思います。その間、もちろん授業

料反対の闘争もありましたし、これはちょっと前後しますけれども二十四年十月にご存じの『きけわだつみの声』が出版されて、いわゆる平和擁護闘争、全面講和・安保条約反対闘争の闘争ですけれども、これへの取り組みが展開して同志社においてもずいぶん精力的な署名活動とか、あるいはそういうカンパニアが持たれたということもありました。さらにこの段階からストックホルム・アピールをめぐる広範な闘争が展開した。

同志社の全学連については、先ほどいった教育復興防衛闘争以来、全学連が結集する中で前に言ったような闘争をやっていたわけですが、そこに有名な党内分派問題によるところの共産党と学生組織とのかかり合いについての指導グループの問題、共産党の指導制に関する分裂が起こって京都の学生運動に非

常に大きな混乱があったわけですね。

全学連のそういう分裂の体系がありますけれども、その中で一応同志社の学生運動というのは、先ほど申しました戦後民主化闘争に始まって、学長選挙権の問題、授業料値上げ反対闘争、破防法の問題、それから学内的には学館経営をめぐる一連の闘争ですね。それから全面講和のための平和擁護闘争ですね。

こういったことが安保に接近した段階で現在の学生運動とどうつながっているのかということはよくわからないんですけども、一番基軸になっているのは、戦争、戦時体験、原体験というんでしょうか、学生の全体のある厚みというか、ある原体験的なものをもとにしたゆるい連帯の中で学生運動としてのまとまりの圏があった。そこでの闘争の形態を見ても、内部抗争はあったとしても現在のようには非をとわず非常にセクツ的で分裂したものじゃなくて、ややまとまりと、それに対する学生大衆の厚みを持った運動形態というものがあって、学園ぐるみの戦いもあったし、教授層と学生とのある程度の共感もあっていたわけです。

平林 まとまっていたというのは、現在のよ
うな日本共産党に対する批判というものはな
くて、いわば日本共産党の指導のもとに闘争
をしようということが六全協まではあったか
らじゃないですか。

小倉 そうですね。しかしそれも学生運動自
身の持っている体質があつて、共産党の指導
に全面的に依拠するのではなく、学生
運動自身の持っているその局面局面での戦い
の形式が共産党の指導と一応一致していた。

平林 大部分の人は共産党の指導でやってい
こうと思つていた時代ですね。

日共からの離脱

平林 年表を見ますと、昭和三十三年九月、
全学連の第十二回臨時大会において学生運動
の方向転換の決議というのをやっています
ね。大体、このへんから日共との対立とい
うものが激化していったと思うのですけれど
……。そうするとやはり昭和三十年代に入
ってから、日共に対する一枚岩的な信仰が崩壊
してきたと思うわけです。

小倉 昭和三十年頃まで、共産党の人たちが
学生運動のキャップであつたことが多かった

ですね。

平林 指導権を握つていたということでは
ね。

小倉 だからよけい全学連の国際派・主流派
の關係にも党内の指導力をどっちが握るか
という党内派閥というものが直接的に学生運
動の指導性に反映するという形があつたこと
は事実ですね。

平林 それじゃ安保前後から現在の問題に移
つてゆきたいわけです。先日三十年代の前半
活動家であつた人に話を聞いたわけですけれ
ども、同志社の場合でも、大体、自立的に行
動を始めたのは、たしか三十四年だといふこ
とです。安保闘争の一年前の三十四年から日
共の指導をはっきり離れて、自立的に運動す
るということ同志社の学生自治会が始めた
といつていいわけです。安保闘争というのは
明らかに日共の指導じゃなくて、全学連が独
自に闘争を展開した。これがブンドですね。
笠原 私が同志社へ帰つたのは昭和三十三年
ですね。学生運動にタッチしたというより
は、むしろ学内でも教職員の立場での平和運
動なんかやっておりましたから、そういう意
味で学生と共闘したこともありました。

平林 高道さん、こまかい歴史はいいですけ
れども、三十七年頃からの学生運動のこと
と、神学部の寮の問題について話していただ
けませんか。

学園闘争としての寮問題

高道 安保闘争というのは、私が同志社の女
学校の教員をしておつた時に体験したわけ
ですが、学生運動とどういふ形の共闘がなされ
たかちよつとはく然としていません。ただ
安保以後あいつ形で強行採決が行なわれ
て、われわれは非常に言論の無力というもの
を感じた。とにかくわれわれの言論とは無関
係に政府の既定方針というものがつらぬかれ
たために非常に強い挫折感というものを味あ
うわけです。私がやはり大学に來た時は、
その挫折感というものをみんな持つていた時



高道基氏

期で、学
生運動も
一時停滞
していた
時期じゃ
ないかと
思う。学

生運動が立ち直ってくるのは、だいたい昭和三十五年頃からの原潜寄港反対とか、ベトナム反戦とか日韓条約反対を契機としてですね。学園闘争というものと結びついて学生運動が起こってきたのもこの時でしょう。だいたい四十年ごろからじゃないかと思うのですけれども。その時に体験したのが此春寮問題ですね。

此春寮問題は巨視的に見たらあれは大きな学園闘争の一つでした。四十年夏にそれまで神学部教育機関としておかれていた此春寮に、学生部から厚生施設の不足にかんがみ、一般学生もいれてくれないかという要請があり、他の学部の寮生が入ったわけですね。ところがたまたま高まってくる学園闘争の中で寮問題が重点的にうきほりにされ、此春寮がその拠点として選ばれたという、そういう性格が一つあったと思うのです。したがって非常に強い政治意識をもった学生の流が強く出てきて、毎晩寮会に次ぐ寮会ということになって、神学寮の伝統に立っている学生たちとの間に違和感をかもしてきたわけですね。それで退寮問題ということが起こってきたわけです。政治主義的な動きについて

いけない、いわゆるノンポリの神学生たちが、これじゃあ耐えられない、われわれは勉強したいのだ、ということできくぞくぞく退寮するような事態が起こった。

それで「もっと民主的にやれんか」ということを私たちが、寮の委員と話したりしてあったわけです。そういう中で、いわゆる政治主義的な学生と、いわゆるノンポリの学生との間の摩擦が感情的な暴力ストーム問題というものを惹きおこし、これに対して抗議行動に立ち上がった学生もいたために、此春寮というものは非常に荒れてきたわけですね。こういう事態が神学教育という面では遺憾だということでも神学部教授会が「介入」という言葉を使っているのかどうか分らんが——教師的な配慮から介入したわけです。

ところがそれが自治寮に対する不当な干渉であるというふうには受取られてくるようになった。そのような不当な干渉があるなら、神学部教授会の干渉を受けない一般寮にしようじゃないか、たまたま厚生施設もたりないことだから、神学部がそういう寮を持っているということ自身エゴイズムじゃないかというのが学生たちの中から出てきて、一般寮化の

動きがあったわけです。ところが此春寮は、元来、神学教育のための指定寄付で建てられているという事情もあり、神学部としてはそう簡単に一般寮化を認めるわけにはいかない。

もしそういう一般寮化するという動きがあるならば、これは断固として神学寮というものを守らなければいけないという教授会の態度があつて、三十九年の寮会で一般寮化するということを決めた時に、それならば閉寮せざるを得ないというわけで閉寮宣言を行なったわけですね。神学部としては強い神学寮維持という決意を出したんだけど、しかしこの措置に対する一般の学生、学内の支持もあまりなく、また先輩たちからも、試験期をひかえて閉寮という措置をするのは教授会としてはあまりにも冷酷すぎやしないかという批判的な声も上がってきたし、また神学部学生で、政治主義的でなかった学生たちもそれによって向こう側に結集しちゃったということですね。話し合いに次ぐ話し合いということで、神学寮の伝統を生かした一般寮とするという形で、四十年三月に妥結して学生部の方に渡した。

ところが学生部にわたってから、それで問

題が解決したのじゃなくて、今度は管理運営の問題と出たことが出てきたのです。これは当然その頃の学生会館の闘争なんかとからまってくる。管理運営権の問題ではまだ話合いがつかない。そして新入生が入ってきた昭和四十年の春から、再び問題が再燃してきて、それまでくすぶっていた教授会に対する不信感とか、新しい神学教育というものを求める教育要求とかがからみあってきて爆発し、いわゆる教授退職要求、ハンスト問題が起こり、遂に神学部初の無期限ストに突入したのです。

経過を申し上げれば大体こういうものですけれども、その中に今の学生運動がやっぱり受けついでいるものも大部あるわけですね。そういう意味では、此春寮問題というのは神学部だけの特種な問題じゃなくて、学生の運動史の中ではやはり見のがすことのできない事件じゃなかったかと思うわけです。このことは僕自身、中にいて痛みを持ってしか言えないことですからね。

学生運動とキリスト教

小倉 その点、笠原さん、キリスト者の学生

組織の問題というのはどうなんですか。

笠原 その問題を組織の問題としてではなくキリスト教の思想の問題として考えて見たいのですけれども。学生運動は安保闘争を契機として、日本共産党から自立した形が出て来たわけでしょう。それまでの学生運動というのは、革新政党とくに日共の指導下にあつて、全国どの大学でも大体同じような傾向があつた。ところが安保以降はそういうのが非常にはつきりして、いわゆる古い左翼と新しい左翼という形に分れた。新しい左翼の方は更にぞくぞくと分れつつあるわけですが、でも、同志社の場合、新しい左翼の連中がインシアティブをとっているということの意味は、思想的な問題だと思ふ。それは同志社の伝統的なキリスト教の理解と関係があると思うのです。これは野口武彦という神戸大学の国



笠原芳光氏

文学の講師が『朝日ジャーナル』に共産党とカトリシ

ズムであつて、新左翼というのはプロテスタンチズムである。つまり共産党は非常に組織的に強固な教団であり、主体的な傾向を持っている新左翼はプロテスタンチズムだという分け方をしていました。同志社の場合やはり、プロテスタンチズムの伝統というものが生きていますね。プロテスタンチズムの中でもキリスト教に対する多元的な考え方、教条主義的でない自由なキリスト教の理解というものがあるのじゃないかと思ひます。

平林 高道さんどうですか。

高道 笠原さんがおっしゃったことはよくわかる。同志社のキリスト教というのは社会的な関心が非常に強くて、それを特色にしていたし、神学生自身もやはり同志社に入つて来ているのには、そういう社会的な見解とか、社会的関心を鋭敏にもつて、勉強していこうという動きがあると思うのです。だが笠原さんが言ったような実存性というのがニュー・レフトと結びつきやすいという点はあるにしても、だからといって簡単にニュー・レフト、実存主義キリスト教という形で一線に結んでしまうことは抽象だ。その点で笠原さんの問題の立て方に疑問を感じるのですが。

笠原 それは、僕は自分自身の立場というのをある程度読み込んで発言しているのですよ。だから僕の主観も入っていると思うんだけどね。僕は今の学生運動家たちと話して、今の学生運動というのは、人間論的な展開をしていると思うんですね。そういう面ではキリスト教の問題に近いものがある。

高道 人間論的ということとは？

笠原 これまでの学生運動というのは革新政党なり、あるいは労働組合の運動の補助的な役割りを果たすというようなことがあった。ですから党のためにとか、組合のためにとか、革命のためにという形があったと思うんだけど、今、今の学生運動というのは学生自身だけの疎外感から始まっているわけです。これは社会的な疎外感もあると同時に、やはり大学内におけるマスプロ教育のせいもあって、非常に疎外感をおぼえている。そういう中で自分自身、いかに生きるべきかということが問われていると思うんですね。そういう状況というのは、非常に人間論的な状況です。今の学生運動は疎外革命という言葉もあるように、人間性の回復から革命を組立てようとしている。党派が先行せずに、自分自身がいかに生

きるかということに賭けるような形で展開がなされていると思う。

高道 その点は僕もやはり運動にあたっていう学生と話していることややはり運動にかけていくことが、自己変革であるということや、それを感ずるわけですから、運動自身の中で、たとえば疎外状況以前の問題もなですか。

小倉 平和擁護の問題にしろ、それに対する学生の参加の形というのが今の学生運動と違った一つの内部的に抑圧された厚みの中の組織活動のまとまりがあったわけで、そのことが破防法なんかの場合でも同志社における教授団と学生との共通の連帯の中でくまれてきたわけですね。これは歴史的事実だからそれをどうこうということはないけれども、そういう運動の形というものと現在の相互の強烈な不信と疎外感からくるところの尖鋭的な、セクト的な運動の側面との非常に大きな断絶のプロセス、このへんをびしっと押えておかないと話していく場合の視点が決まっちゃいけないわけですね。

河野 学生運動のまとまりということね、これは日共の下にあったということと関係があ

る。しかし、日共から離れたあとの安保の時ね、これは同志社でも教職員組合とか、生協とか、学生とかね、みな一緒にやった。だから問題にもよるんですね。

笠原 六〇年安保までは、まだまとまっていたんですね。

小倉 だから『きけわだつみの声』ということが合言葉としてまだある種の共感を持っていた段階なんですね。それを単に原体験というふうな言い方をしているのか、あるいはもう少し学生運動が全体として一種の心情みだいなこともあると思います。

現在の学生運動

平林 学生運動に実際タッチしておられますから、河野さん、現在の同志社の学生運動の問題点とその性格というようなことで、何か言ってもらえませんか。

河野 高道さんの話を聞いていて思ったんだけど、学生たちが、教授会とか大学を権力としてとらえるようになったのはいつ頃からでしょうね。どうも僕は六〇年安保問題のあとからじゃないかという気がするんですね。

小倉 それは参加要求なんです。同志社なら

同志社の教学体制の中に参加をするということなんですよ。

笠原 最近に参加じゃなくて主体になるんですね。

小倉 参加と主導力の把握、主体なんですよ。そこがえらい違いですよ。既存の体制と権力は一応倒してしまわなくてはやまないということなんですね。その転換がいつからかということが確かに大きな問題です。

高道 僕は三十三年に、教職員組合連合の委員をやっておったわけです。その時に学友会から共闘体制をつくらうというような呼びかけがあったんです。大学の教授会自治・学生の自治と並列的に、同質的なものとしておいてね。ところが、それはやはりおっしゃるように最近ではうすらいできています。しかし、全然なくなってしまうとは言えないんじゃないですか。たとえば、教授会の自治というものを、やはり学生は、教授会の主体性確立というか、そういう形で要求するわけでしょう。

河野 教授会の自治など認めないと学生たちは言っているわけではないのです。それは大学の自治のなかにおける別の機能なんだとい



河野仁昭氏

うふうにとらえて
いる。
平林 その場合
ね、同志社のいわ
ば主流派の学生運動の人たちは、自治とい
けれども、教授会に自治があるのかどうかと
いうことに疑問に思っているのじゃないの。
河野 教授会の自治は認めていますよ。

平林 いや、たとえば新聞なんかで、僕らが見る限りでは、「形式的民主主義者」という言葉が出てくるし、自治を守れとか、暴力否定とかが掲示・公示として出るけれども、それじゃ教授たちが自治を守っている内容が現在あるのかどうかということに疑問を持って
いるのじゃないですか。

河野 それは不信感なんで、だからといって教授会には自治などないとは言っています

平林 自治というものもね、内容が変質していくものであるし、作っていくものだと思います。考え方があると思います。

河野 それはそうだけど。学生たちは、空洞化しているということを言いますね。

平林 そうすると、それは自治があるということに思えなくなってくるのです。

河野 うん、実質的にはね。空洞化してしまっ
ていては、教育とか学生の問題に関して
は、有効に機能しているとはいえない。

平林 いや、三派系の人たちが言うには、自治というものは、まずあるものだという考え
方自体がおかしんだ、大学だったら自治がある
んだと単純に考えているのがおかしんだ、
とっているのじゃないですか。

笠原 それは幻想ですよ。

小倉 だから、権力というものに大衆団交を
求めるという形式にしたって、それはいわゆる
教授会自治を認めたり、学長の一つの大学
自治の責任体系のキャップだということ
を認めるのじゃなくて、新しい自治の、彼らの言
う「人民の大学」とか大学コミュニケーションとい
った自治の体制をかちとっていくという姿勢
であって、既存体制をぶっかわしていかなく
ちやいけないうことは、はっきりしてい
ます。理由はどうであろうとも、とにかく現
在の固定した、あるいは形骸化した、いわゆる

る大学自治、これは彼らは絶対に容認して
ないわけですよ。

小林 それじゃ、現在の問題、その性格と関
連して、教師としての立場から問題を出して
頂きたいと思います。

河野 僕はやはり大学とか学生の自治という
問題にひっかかるんです。大学の自治なんて
神話にすぎないという意見もある。それじゃ
学生の自治はどう考えたらいいのか。

小倉 やはり学生は結果のみを引き受けさせ
られるわけです、今の自治の中では。「こう
決まった」「こうなった」と、結果のみを学
生は引き受けさせられるわけです。そんなこ
とは御免だという。大学の場合は、主体者は
むしろ学生なんで、だから学生が一つのパワ
ーとして大学の中に一つの決定的な一つの体
制へのヘゲモニーをとれる形の条件をつくれ
というのが共通の要求ですね。そういった形
からすると教授会自治という古い幻想はぶっ
こわれるわけですよ。はっきりこわれます
よ。対等な、一つの決定権、パワー、それを
容認しろというのですから。

小林 それでは、自治ということをめぐっ
て、安保以前と以後ではどういふふうに通っ

てきたのでしょうか。

河野 だからさっき言ったように、大学側を
権力としてとらえようとする。権力に対して
ならばはっきり対抗するとか、ぶっこわせとい
うことになるわけですよ。

高道 私は学生の立場から言って学長を権力
とだけとらえるという風には今の段階では、
見てないと思うのです。

河野 いや、僕は彼らが権力としてしか見て
いないとはいっていないので、そういう側面
を非常に強調しはじめたということですね。

小倉 自由であり、党派性からフリーですか
らね。

暴力事件と声明

笠原 六月四日に学内暴力事件というのがあ
ったでしょう。これは社会学同の連中が民青の
連中に対して暴力をふるったわけですね。事
実についていろいろあるでしょうけれども、
単純化して言うところのことだと思っ
ます。僕はそのことは非常に残念なこと、暴
力をふるってはならないと思うのですが。そ
のあとですね、学内の教職員有志から暴力は
いけないという形で声明が出され、広範な形

で署名活動がなされた。それに署名した人
を見ると、進歩的な人も、あるいは保守的な人
も一致して非常に多くの人が署名している。

僕は署名しなかったのですが、この問題を考
えてみると、確かに学生が暴力をふるった、そ
れはいけないということは言わなければなら
ない。しかしそのことを言うためには大学に
おいて、少なくとももっと思想的な、もっと
全体的なことをこめて暴力に対して批判をし
なければならぬ。あの局部的なことだけが
暴力じゃなくて、それがいけないというた
めには同時に今の国家権力の暴力、羽田にしろ、
佐世保にしろ、それに日常の政府の暴力、あ
るいはアメリカの暴力というものに対する徹
底的な批判がなさなければならぬ。それに
一言も触れていないということは、これは自
民党が七月の参議院選挙で、「日本ほど自由
な国はありません。この自由を守るために暴
力はいけません」というようなスローガンを
出したことや、警察署の前に行くとか、「暴力
はやめましょう」と書いてあることと少なく
とも文面においては変わるところのない声明
であったと思う。あえていうなら大学とし
ての知性の欠如があると思います。ですから

僕もあの事件、それ自体は暴力だと思えますけれども、角材とかヘルメットというのは、国家権力に対しては決して暴力じゃない、むしろ非暴力だと思う。非暴力というのは、無暴力と違って非暴力の抵抗というか、非暴力直接行動というか、そういう形で用いられる時には、必ずしも暴力ではないのじゃないか。

小倉 笠原さん、あの六・四事件は問題は非常に限定されておつてね、いわゆる内部ゲバルトというやつでしょう。

笠原 そう、そう。

小倉 文学部教授の間で内部ゲバルト——これはよくないのじゃないかということ、しかも学内でやったということ。こういう限定した意味で、僕らは批判をしたつもりなんですけれどもね。

河野 機動隊つてものは、国家権力の暴力装置みたいなもので、六〇年安保前後から昨年の羽田、佐世保あたりまでみていて、学生のデモがああいうふうにエスカレートしていくのはわかる気がする。僕には共感できる面があるわけです。ただ、そういう現地闘争の形を、そのまま学内へ持ち込んでいいかという

ことになる、これは問題だと思う。性質がちがうんですよ。

小倉 学生運動同士のいろんな意見の相違やいろんな確執がありますね。非常に高度の理論的な局面での対抗関係もある。それを何もゲバルトによってああいう形でやる必要はないだろう。そういう限定つきの形で声明を出したつもりなんです。

高道 一般的に危機感というものをものすごく強く持ったですね。何か言わざるを得んという、そういう署名だったと思うんですよ。

河野 ああいう声明を出したり、署名をすることをくらいなら、それ以前に、なぜ僕は教授会がその問題を取り上げて議論しようとしないうか。そこが非常に疑問なんです。

平林 たとえば六・四事件で被害を受けたのは商業高校なんです、その時に大学の先生は何をしているのか、という声がかなり商業高校の先生方から出されたわけです。商業高校の生徒も、自分たちの学校を荒された、教師がやらないならオレたちの手で防衛しなければしょうがないということまで生徒大会を持つたわけです。そういうような商高の先生や

生徒が思ったことも視野に入れて、学生運動に関する教師の立場をもう少しつっこんで考えてみようと思うわけですが……。

学生運動と教師の立場

笠原 学生運動に対して教師が何かするというのは、教師は教師の立場でベトナム戦争なり安保改定なり、それに対してどういう発言を自発的にしていくかということにかかってくると思います。学生に対する問題じゃない。自分たちの問題だと考えるんですけれどもね。自分たちではなにもしないで学生運動に対処するということは教師としての資格を失っていると思うんだ。そういう賛成なり反対なり自分たちの態度を明らかにしていくということを通して教育がなされると思う。それがいいものだから学生が教師に対して不信感を持つんじゃないか。

前の安保闘争の時に、時の大下学長が個人の名前で安保改定に反対であるという声明を弘風館の前に立看板に書いて出されたわけです。安保当時あれだけでもやったということは自由の精神がある。その自由な勇気を評価します。そういうことがかつてはあったわけ

です。

小倉 そういう点では確かに学長選挙問題であの時学生が「先生らはどうなんだ」ということをしきりに言いましたね。学生の一つの疑問に対する、ほとんど積極的な大学の教授会からの解答なり、対案なり出なかったというところに、それは確かに教師側の姿勢のあやふやさと同責任体制みたいなものを露呈していると思います。

平林 僕なんか、日本の近代思想と戦後思想というようなものをどう止揚するか、ということを考えるわけですけども、私たちのなかには、右翼、左翼の天皇制的なワクから出ていない習性のようなものがあると思うんですけどね。何か、大義名分論といいますか、そのワクの中にちゃんとはまっています。戦中は天皇制、戦後は左翼の政党的イデオロギーによりかかっちゃって、そのワクから出ることができない人が多いんじゃないか。だから自分の頭を痛めて考えるということをしなくて、ある特定のイデオロギーのワクの中にいて、正しいことをいつも正しくしゃべっているという風になっているのではないですか。ですから、自分の頭を痛めて考える態勢

の確立ということをし、まず苦しいけれどもしなければいけないのじゃないかと思うわけです。

河野 自分の頭で考えてはいると思うんですけど。ただ現在の教授会の体質に問題があるんじゃないかと思うんです。構成メンバーの一人一人は自由なんです。思想も信条も政党の支持も……。そういう個々人のちがいは、ちがいがとして共存している。そこまではいい大切なことなんです。ただ、教育者集団なり組織としては、それだけでは困るんで、授会内での相互理解の努力さえあまりはられていないんじゃないですか。

小倉 だからその場合、平林さんの言うことを通じて、結局ぼくには、理解を絶するという、そういう感じがあるわけだな。

平林 だからそのことは、私たちが考えてこなかった証拠ですよ、今まで。

小倉 そう、考えてこなかった証拠でもあるね。それは、必ずしもイデオロギーでね、イデオロギーが硬直しているのじゃなくて、つまりもっと別の形で今の三派の諸君たちの発想なり、行動形式なり、あるいは将来に対する一つの戦略戦術といってよいのか、そのい

う一つの到達点についてなりね、理解を絶するそういう断絶感というものが、すごく強いですよ。それが一つと、そうではあるけれども、まだまだ説得をしたり理解できる場面をつくれるであろうと、もっとインフォーマルな形で彼らに接触すれば理解のパイプはつながるであろうと。そういう二つの流れがあるとと思いますね。どっちかというパイプがつながると思う人は少数派になっちゃって、どうにも断絶してしまっただうにもならんと感じが強くなっている。

平林 教育者失格になっちゃう。

小倉 まさにそうなる。その点そういうことがあるんですよ。

高道 今ではとにかく教授会の思考の次元と学生たちの思考の次元は完全に食い違ってお互いにわかり合えなくなっています。それを埋めようという努力も両方からされてない。

平林 問題をもう少し進めて、この一、二年同志社大学当局がとってきた学生たちに対する態度とか、あるいはそういうことに対して……。たとえば学長が会わなかったということがあるんでしょう。

笠原 大衆団交という形では会わなかった。

河野 いろんな大学での大衆団交みてるのかなかなかむずかしい問題があるんですね。だけど僕はやっぱり学生と大学の責任者は会った方がいいと思う。特に田辺土地利用だとか図書館建築など具体的な問題についてはね。会わないと誤解を生むだけなんです。学長一人ではよくわからないなら、部長会メンバーや事情のよくわかってる人たちに同席してもらってね。

小倉 評議会との団体交渉がずいぶんあったでしょう。何度もこれは。

河野 ええ、寮問題で評議会とはね。そのまえに部長会メンバーが会った。学長が休職中だったということもあるけど、部長会では問題を解決できないので、評議会の方へ肩がわりした。議決権をもっているのは評議会だということ……。

ところが、その評議会も会おうとしないものだから、学生たちは卒業式や入学式を妨害するという戦術をとってきた。それでやむを得ず会ったんですね。もっともまずい会い方ですよ。そういういきさつから言えば、学生たちが怒るのももっともなんです。

平林 大学もまともに答えようと思わないし処罰もしないという、そういう今の大学当局のやっていることはどういう意味があるのでしょうか。

笠原 処罰をしないとされたけれども、今の大学に学生を政治問題で処罰する権利など全然ない。

河野 権利はともかく、大学がいまの有様じゃあ処罰はいけないと思う。処罰以前に手をつくさねばならない問題が沢山あるわけだから。

小倉 それは、やっぱり基本的に現在の学生運動が思考し、願い、考えている問題に対して、今の同志社大学の教授会自治を含めての体制が、責任のとりかたにとまどっているのですから決定的に困るわけです。たとえば教授会は教授会で学生に対するいろいろの動きを部長や主任から聞いて、状況判断だけして声明を張り出しておしまい。学生のそうとう煮つまった激しい迫力のある態度に対して何ら責任のとり方において対応し、考えていくことができない。まして処罰なんか出来るはずが無い。

高道 同志社とか東大だけじゃあないです

ね。これは大学自治の問題です。大学は神話的な自治しかもってなくて、自治とは何かということが状況的に問われていない。

平林 だから、ぼつぼつ大学は崩壊しているという意見が新聞紙上に出て来ますね。

笠原 だから教授会にしろ評議会にしろ組合にしろ、組織で対応するという形が非常に困難で、かつ崩壊している場合に、教職員は市民運動的なものを大学の中でなくやるべきだと思っわけですよ。もっと個々の教師が学生と対話するなり、学生に対してアピールするなり、あるいは自分たちの意見をいろんな形で述べるなり、そういうことをどんどんやればいいのだけれども、ほとんどそういう場合、組織でみんな決めたこと以外はノーコメントですね。ベトナム問題に関しても、安保問題に関しても、学生運動に関してもオーブンに言えばいいですよ。同志社はそれができる大学だ、できなければならぬと思う。自由の学園というのは、そうでなければならぬ。

小倉 その点では、やっぱり依然として安保以前の発想やな。

笠原 そうです。

小倉 いかにか学生運動が質的にかわったか、その志向するものが違ってきたかということに対する認識の欠如です。これはあらゆる場合に出てきています。笠原さんが言われるような、そういうことも含めてですね、もっと流動的なものに大学を変えていかなかったら絶対にいかんと思います。

平林 ですから、いわば今の同志社の中に創造的異端といわれるようなものが出てこなければならぬですね。

小倉 一つは、そのエネルギーをもっと対学生とのいわゆる対話であるとか、もっと新しい組織の中で、学生との対応関係をつくるどころにエネルギーをさくべきだという感じもするんだけれどもね。

高道 カリフォルニア大学のバークレー分校闘争というのがあったでしょう。あれなんかやはり教授会たちの要求と、学生たちの要求とが一致しているわけです。たとえば、教授会なんかは研究の自由を欲しいと、ああいうバークレーのような超マルチバーシティーみたいなところでね。教育というものはできなくなつて、会議ばかりおわれて研究も何もできやせんという教授の強い要求があった

わけです。そういうのが騒ぎのうしろに伏在していたと思うのです。だから会議ばかりあるという大学に対して、もっと自由が欲しいという要求をしてもいいと思う。

小倉 だから学生部長が決まらんから問題解決しなかったり、うまくはこばないみたいなの言い方でしょうこれはおかしい。そこにも今の同志社の教育管理体制の欠陥が露呈しています。

河野 学生部長とか、学長とか僕はそういう人を信頼してゆだねるといふんじゃなくて、逃げていると思うね。

小倉 そう、それしかない。

フーテンと全学連

平林 学生運動の場合には、何に対する反逆と抵抗であるかということがわかってるわけですが、現代のいろいろな青春のあり方というものと関連させて、学生運動をとりあつかうとどういうことが出てくるか。

笠原 僕は学生運動、特にいわゆる新左翼の学生運動というものと、一般の青年たちの示している状態、一般といつても特徴的なことですけれども、たとえばフーテンとかヒッピーとかかいう状態があるでしょう。そういう状態とは、底の方でつながっている面があると思う。学生運動をやっているのは一部の学生であるとか、そういういい方をするのはまったく問題をとらえていない。ですから権力からの反逆、反抗だけじゃなくて、権力からの脱出とか離脱というものを含めて、何か非常に大きな疎外からの逃亡とか、あるいはそれは対する反逆がある。これは総理大臣や文部大臣が国家意識とか国防教育だとかいっていることに對する青年の大きなアレルギーだと思ふのです。ですからフーテンと全学連というのは極端に違うように思われる面があるわけですが、底に回路があつてつながっているということをはっきり認識するというのが、今の青春というものを全体的にとらえる道だと思ふわけです。

平林 フーテンのことなんですが、僕はよく知りませんが、雑誌なんか見るとアメリカのヒッピー族というのは子供を連れて歩いていると書いてある。それはいわば生活形態として、そこでは存在しているということなんですけれども、いま笠原さんの話を聞いていると、日本のフーテン、それ自体も生活形態と

してそこに存在しているというふうな考えでいいのかな。

笠原 いや、まだ日本のフーテンというのは一部であって、社会からの離脱という傾向が強いと思うのですけれどもね。しかし、どういふのかな、そういうフーテンだとか家出とか蒸発とかということに対する一種の願望みたいなものが、僕らの中にもあるわけですよ。そういうものと、国家権力に対して反発している学生運動というものがどこかつながっているということだな。フーテンというのは非常に特殊な現象で、それから三派全学連というのも非常に特殊な現象であるというふうにとらえるのじゃなくて、その間に介在している一般大衆、われわれ自身も含めたものがあるということです。一種の人民戦線的な共感ですね。国家権力に対するそういう連帯ができないでしょうか。そういうものをつないでいきたいと僕は思うわけです。

体制対人間？

小倉 今一つは、状況の中では独占とか経済成長とか福祉国家とか、それから体制のセメントがどんどん注入されて、既存体制が固ま

っているでしょう。その線に沿って一種の新しい自助原則やら立身出世主義でね、そのルートですって考えていく青年の流れがあるわけですよ。依然として、その一つのタイプの中に大学というものがはっきり役割をになっている。その既存体制へずっとのっかっていける一つの動きがあるわけでしょう。そういったことの対比によって学生運動が疎外感、全くそれはその体制に対して疎外されているわけでしょう。疎外感を持っているわけです。そこに一つの反体制、反権力的なエネルギーがずっと蓄積されている。そういった反権力のエネルギーが蓄されていって、表現の一つの形として全学連のあいうゲバルトもあるだろうし、闘争経験というものも出てくる。

笠原 そうです。

小倉 大学というのは、局部じゃないですよその背景にある全体の体制支配が貫徹しているという感じが強いわけです。

笠原 ですからメカニズムというか、テクノロジーというか、産業社会というふうなものと、それ対人間という対応関係としてとらえないとトータルなとらえ方にならない。

小倉 イギリスのニューレフトなんかをみても、そういう感じが強いですね。人間の関係といえますか……。

笠原 高道さん、また人間論が出てきたんですけれども。

高道 僕も、感心して聞いてたんですけれども。

河野 僕は今の社会状況とか政治の在り方とか、そういうものを頭から肯定している学生というのは、そんなに沢山はいないと思う。それを非常に意識的、積極的に越えていこうというか破壊しようとする人は街頭デモに出かけていく。街頭デモとは逆の形でフーテン族なんかが出てくると思うんです。デモ族とフーテン族にははっきりつながりがある。

河野 資本主義社会にも、社会主義社会にもそういう傾向はみとめられますね。

平林 笠原さんに質問しますけれども、メカニズムといったけれども、それじゃ基本的に自由主義社会も社会主義社会も含めて、何と何が対抗しているということになるのか。

笠原 体制対人間ですよ。つまりマルクス主義の理解によれば社会主義社会ができれば、

あるいはそれが共産主義社会になっていけば人間が自由になって発展するという考え方があるでしょう。それはある面において、確かにその通りだと思うのです。しかしながら、

社会主義なり共産主義になっていく国々の中で、やはりそれなりの社会主義体制、共産主義体制というものに対する、新しい別の形での人間の抵抗というものが起っているということは、資本主義よりは社会主義がましだということであって、社会主義なり共産主義なりの体制が絶対がいいということは必ずしも言えないのじゃないか。ですから資本主義体制におけるメカニズムであれ、社会主義体制におけるメカニズムであれ、あらゆるメカニズム対人間という問題を、もう一回底から問い直していく必要があるんじゃないかと思えます。ですからマルクス主義者は、マルクス主義の中でこの問題を考え、実存主義者は実存主義の中で考えて欲しいですね。キリスト者はもちろん今までのキリスト教ではだめだということを再三考えているわけです。

河野 問題はこういうこともあるんですよ。どんな前衛政党でも、それがひとつの権力をもつてくると組織それ自体を維持しようとする

る、つまり保守的な機能がよく働くようになって、徐々に前衛性をうしなうし、人間性を喪失させるんです。若い世代にはそれがまんならないわけです。

小倉 その点、今の三派の諸君の書いたものを見たらね、心情を尊重するんじゃないですか。心情集団的な面が強いですね。

高道 自己凝視とかね。

小倉 そう、用語法でも一つそういう点もあるし、だからその点でイデオロギーよりは、自己の心情に忠実であってね、その点いわば共通の体験を尊重しあって、その中からくる行動への連帯を、非常に大事にするという点がありますね。ヒューマンなところがあると思いますね。

河野 心情的と言えるかどうか知らんけれども、あまり論理的でないということは言えますね。

平林 だから、批判者はその点について、二・二六事件などの青年将校と同じエモーション、心情につながるものだという形で批判するわけです。

イデオロギー不在の心情？

小倉 つまり安保以前の学生運動と違うのは以前はイデオロギーはイデオロギー、心情という一つの分断の整理があったわけですよ。参加がやはりしやすいですね。ところが、

今の全学連で参加の形はいわば全面参加というのかな、オール・オア・ナッシングという形で、そこへ投入しなければ、やっぱり心情集団の中の一つの自分自身も支えきれない行動に参加できないという強烈なものを持っているわけですね。だから当然距離があく。

笠原 この間京都でベ平連の「反戦と変革に関する国際会議」というものがあって、非常に面白かったのですが、その時に三派全学連の委員長の秋山勝行氏も来ていたわけです。その秋山氏が発言をして、ベ平連のような、つまり反戦という形だけの市民運動じゃなく、徹底的な帝国主義に対する闘争という形に持って行かなければだめだということを言ったわけですね。それに対して松田道雄さんが立ちあがって「自分は全学連に対して非常に親近感をおぼえているが、秋山さんの書いた『全学連はなにを考へるか』という本を読んで、秋山さんのトロツキズムのところが間違っていると思う。もっと勉強してはし

い」ということを言ったわけです。他の人が学生に勉強しろと言ったってあまり効力はなはいと思いますが、松田さんが「もっと勉強しろ。勉強しながら運動しろ」と言ったことは非常に意味を持っていましたね。松田さんはロシア語でトロツキーを読んでいるわけです。学生運動家は一般学生よりかえて勉強している。僕は思うんですけども、その中で心情を論理化し、思想化していく勉強をしていくことを松田さんのその言葉から学びたいと思いますね。

河野 三派の学生の運動のすすめ方をみるとなにかハプニングと共通するものとときどきあるんですね。

小倉 イギリスなんかのニューレフトの場合も、今の労働党に対する一つの批判なんです。批判だからネガティブな形でするわけです。独自の対抗できる体系のないものは出てこないという感じですね。ハプニングと今言われたけれどもね、そういう心情を含めて次から次へと批判的なテーゼを出しては、状況に対応するというそういう無限運動みたいなものを持っているのですね。

笠原 そうですね、ですから、非常に逆説的

な表現しか言えないと思うのです。論理ならざる論理、組織ならざる組織というかな。そういうものをつくる未来的な問題だと思う。

高道 そういう未来的なものにかけていると思う。高道 それじゃ戦略的、戦略的と言っていないが、結局指導とか、啓蒙とかいう役割りを学生運動に期待することはできないということと違うかな。たとえばアジア、アフリカなんかの学生運動を見てね、民衆に対する啓蒙的な役割りを持っているでしょう。そういうことをやはり学生運動に期待したい、期待しなければならぬのじゃないかと思うのですけれども。

笠原 先駆者とか、起爆力とかね。それはやっぱりあるんじゃないかな。ですから一九六〇年代の退廃の中に眠りかけていた面がわれわれにもあったわけですね。僕ら六〇年を闘った人間でも、七〇年はどうなるだろうなあとということをやっていたわけですよ。七〇年には万国博もあるしねとか。それに対して羽田、第二羽田、佐世保、成田という事件が、やはり僕らに対して七〇年近しいという示唆を与えたんですね。

小倉 この昭和三十一年に出た『戦後日本の

学生運動』の場合ですけれども、今、高道さんが言われたとおり、この段階で学生運動の任務といのは先駆的役割りの遂行として定式化できるという形で述べて、「先駆性とは味方の戦線に先がけて、戦いの方向を示し、あるいは敵の攻撃の方向を示し、あるい敵の攻撃の方向を早く察知し、味方の陣営に警鐘を乱打する役割りである」規定が与えられていますね。

河野 たとえば、こういう役割りはしてると思うんですけど。彼等の行動から、大学のゆがみだとか現在国家権力がどうなっているとか、基地の問題とか、要するにそういう問題が露呈される。

高道 成田でも王子でも警鐘を乱打されたからね。

小倉 学生層に課せられた任務は、先駆的役割りに尽きるところ言っていますね。

笠原 それはやっぱり古い主張だ。もっと学生たちはトータルなものだというふうに思っているのじゃないですか、自分たちでは。それが客観的にトータルであるかどうかは疑問ですけれどね。

平林 戦前昭和期の革命運動の中では、非転

向は絶対善であり、転向は悪だという認識があった。転向者と非転向者の間の精神的つながりというものは全然なかったわけです。そういうことで、戦前の革命運動における後退戦は失敗したわけです。現在は日共が三派系全学連をトロックスト・裏切り者・分派と呼んでいる。三派全学連は、実は日共の生み落した鬼子みたいな側面もあると思うんですね。そういうふうにならずに一線をかくして、純血主義というふうなものでやってしまっただけのものか。

笠原 内部での争いというのは困ると思いませんね。権力を打倒するというのは正しいけれども、自分が権力を持つという考え方でないものをつくらないといけないんじゃないかと思えますけれどもね。

小倉 それはしかし、ある意味では非政治性みたいなものですね。へたするとアナキーですよ。

笠原 アナキーということは、必ずしも悪いことではないと思う。アナキーということが、今までは非常に無秩序であり、テロと同じみたいな考え方であったが、そうじゃなくって、そういう組織ならざる組織、体制なら

ざる体制をつくるという積極的なアナキズムというものがあるんじゃないか。そういう場合に、彼らが権力争いをしていたのではどうしてもだめですね。むしろ権力でないものを打ち立てる。打ち立てるということは矛盾しているけれども、僕はその点だいぶん宗教的なものを感じてるわけです。

平林 だけどそういうふうな、たとえば権力的とか権威とかいうものを作ってしまうということは、日本人じゃなくて人間そのものにあることなんです。

笠原 だからそれは一つの罪だということですね。罪というのは、誰にでもあるけれどもそれはやっぱりあってはいけないんだという面があるんじゃないですか。権力意志というものは誰にでもあるけれども、あってはいけない。そのへんに内的な相克というものがもつとあるはずだと思っただけでも、学生運動にもやはり権力志向というものがあるという点は悲劇的です。

平林 さてだんだん時間もなくなってきたわけなんですけれども、今私どもは言いたいことを率直に話ってきたわけです。今度は自分を含めての学生運動への対応の仕方というよ

うなこと、これはしんどいことだと思えますが、それを最後のしめくりとしたいと思えます。ではどなたか――。

高道 僕は学生運動というのが状況変革の大きいファクターになってきているということに卒直にみとめることにあると思う。

小倉 だからスチューデント・パワーという言葉があるけれどもそれが本場に身にしみてね、そのパワーというものはつきり僕たちが認識をしてそれに対する接触と関連のもち方をよっぽど頭において考えなければいかならぬということに思います。まだパワーだと思っていないんだから。まだ規制のわくづけられた力として動きうるだろうという幻想をもっているからあかんということですね。そういうものじゃないということですね。

「対応」ではなく「ともに考える」

笠原 「対応」という考え方はせんせんまちゃがっていると思うね。われわれは国家権力に対して自分の考え方をとんどん言っていくべきだ。それが学生と一致する面もあり一致しない面もあるだろう。学生とわれわれと共通の敵というものがあると思う。敵という言葉

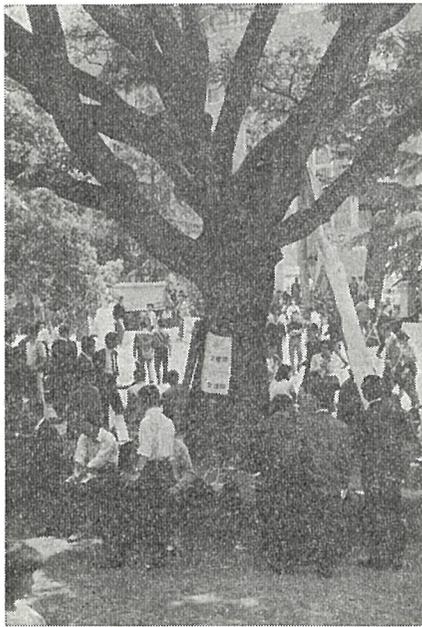
はあんまりつかわん方がいいが共通の対応するものがある。

河野 学生たちと一緒に考えようとする大学の姿勢ですが、寮の問題にしても、会館の問題にしても、あるいは学長選挙の問題にしても、学生たちを押さえよう、押さえようとするのじゃなくて、学生たちと共通の問題について議論して自分の意見を返す、そういうことを実際にやっている教職員がはたして何人いるかということが、僕は一番大きな問題だと思ふんですよ。先生方と話をしておつても、そういうことをせずに学生たちを敵のようになんか言う人がかなりいるのです。僕はおかしいと思ふ。はっきり言って、敵であるなら、そういう相手に教室で教えているということと、自分で、矛盾すると思ふんですよ。

小倉 その点については、今の学生運動、特に同志社の学生運動全体についての評価という面が入ってきているわけです。やはり非常に限られた少数者が無理を言つるとするというような。そういう判断がどこかにあるわけですね。だからその部分をなんとか押えきつたら決して今のような混乱は起こらないし、回避できるだろう、つまり安保以前と以後の学生

運動の体質に対しての非常に大きな無理解があるという感じ、それを愛さないといけないと思ひます。それは本当に少数者が無理を言つてるとたとえば一万八千の学生がおるとその中のわずかアクティブメンバーは数百人であろうしシンパを含めても千人とかなんとかいう、そういう計量化した形で、一種の数で押えるような発想があるでしょう。そういう少数者が無理を言つて大学全体の学生大衆の要求と大学の体制をマヒさせていると、こんなことに譲歩できるか、という強圧論理の背景には、そういう認識がやっぱりあるわけです。

平林 そうすると、それに対してなんかしなければならぬということですね。小倉 幅広く。安保前やったら幅広く、一人でも多く、というでしょう。そう



いうことは考えてないですわ、主張の基軸でね。組織のポイントを押えるというのがいまの徹底した方法ですよ。いまの対決している局面というのはね。だから二、三十人がぐればね、完全に機能マヒが起るということですよ。そういう形でしょう。その機能マヒを起している少数者のそこだけを見て、だから彼らは少数者であると言ってしまったら、今のスチューデント・パワーの持っている現実認識は全く失なわれてしまうわけですね。だから全面的に学生に対するかかわり方というの

かな。それを先ほど笠原さんが言ったように変えなければおそらく今の固定化され、定式化された管理方式中では、おそらく一歩も動かんだろうと思う。つまり学長選挙にしろ、学園問題にしろ、授業料値上げ反対の問題にしろね。寮にしろ非常に具体的な技術的な問題がからまってきよってね。それが今言った学長、評議会、教授会、学生主任懇談会学生部というような一つの学生の接触するポイントがあるでしょう。系列の差はあるけれども、全部からまってきよるわけです。あらゆる問題についてね。そういう場面で今の学生のスチューデント・パワーみたいな形が持っている非常に深い課題のつき合わせ方がね。どういふ局面で触れあって新しい事態が生み出し得るのかという、その辺の新しいとらえかたをふくめた何かが出てこないですね。今のままではだめだということはある。わかなんだけれども。

笠原 少なくとも何かの形で学生を大学の広い意味での行政に参加させなければだめだと思う。学長選挙権が一応、学生にあるということが、かえって欺瞞的なものになっている面がある。あれは十年ほど前から少しも発展していかないわけですよ。今度の選挙規定で職員の場合、比率は変らないが最終選挙まで権利が進んだわけですね。ところが学生の場合は放置されている。民主的な選挙規定はどんな発展させていかなければならない。

小倉 二十四年、二十九年段階のまま形式的デモクラシーは放置されているわけです。

笠原 学園評議会というのは非常にむずかしいと思いますけれどもね。やっぱりそういう方向に踏み切っていくべきだと思いますね。それで崩壊する大学なら、むしろ崩壊した方がいいくらいだと思いますね。

小倉 一種の学園コンミュニティみたいな問題が出てきているわけでしょう。

笠原 器量がないんだな。そういうことを出したらたちまちのっとられると思っている。

平林 恐怖をもっている人もいる。

笠原 それはおかしいと思うな。そういう態度を大学が示さない限り、学生運動はますます激化していきます。当局というのは多少保守的なものとは僕も思いますよ。それは、何でもかんでも学生の言うことは聞けないと思う。それでも学生の要求を認めるという方向にいくべきむしろ進んで発展させるいう方向にいくべき

じゃないかな。

平林 現在における学生たちの抵抗についてはどうですか。

笠原 それは、体制に対する抵抗であり、同時に自分自身に対する抵抗でもある。そういうことが含まれる抵抗だということですね、現代の抵抗というのは。

河野 話しがそれるかもしれないけど、一般学生といういい方をよくするんですね。便利なことだからでもあるけど。しかし、そのことばに対応するような学生はいないですよ。

小倉 それは慣用なんだ。一般学生というのは。

河野 問題はどいう所にあるかと言うとね「活動家学生」というのがおるのです。いわゆる「一部の学生」です。それと相対立するものとして「一般学生」をとらえる。つまり「一部の学生」をうき上がらせたり弱体化させるためには、一般学生の関心をとらえることが有効だという考え方があるわけですよ。ところがね、それじゃ一般学生と言われていた学生たちが、大学の意思のとおり動いたケースがあるかというとはとんどない。学生

たちは大なり小なり大学に不満をもっているんですよ。第一、活動家学生と一般学生というふうに切り離して考えること自体、僕は間違っていると思う。

笠原 それがわかっているか、わかっているいかでだいぶちがってきますね。

小倉 そう、そのへんから、つまり学生とのかかわり合いのたて方が違ってくるんじゃないですか、基本的に違ってくる。

河野 活動家学生というのは、街頭デモにも出ていく学生というふうに言うならば、比較的僕はわかるんですけどもね。しかし一般学生は出て行かないかということそんなことはないのです。たとえば、御堂筋デモなんかえも、三派でもなければ社会学でもない学生が行っていますよ。機動隊になぐられて傷を負って帰ってきたのありました。日常的に活動しているかいないかというちがいはしかないですね。

小倉 そうですよ。僕もそうだと思うな。

小林 視角がないということですか。

小倉 視角がない。そのあたりでしか、今の学生運動に対する判断の素材というものがな

方がないし、そういう場面もない、講義に行けば自分の言いたいことを言って、帰ってくるというようなことで、まあせいぜい演習ぐらいのもんです。演習にかかわる学生の層というのは限られていてね、ますます暗中模索でスチューデント・パワーが持っている総体構造の深さに対する認識が全然ないということです。そういうことも大きな限界ですね。高道さんどうですか。

高道 教授会だけで、自治を問題にできる段階は崩壊し尽くしてしまっている感は深いね。

小倉 そう、ただ自治のたて方が問題。それが安保前と今じゃ全然違うんだということをはからんといけないと思います。せいぜい安保前の、もっと戦争直後のああいふ民主化闘争的なものの延長線上で、なんとなく学生の自治要求を受け止める段階ではもうだめだということをはからんとだめなんだが、それはなかなか僕ら自身を含めて、わかりにくいし、では一体どうすればいいのかということをお言われたら、全くノーマイデアという形でしょう。そこが現在の悲劇です。そこをつききって、何か新しい状況を生み出すように僕

らも考えんとあかんし、学生もつつ走っているわけだから。このエネルギーに依拠して何か生み出すことはできないかということが課題ですね。

小林 学生運動に対して理解者であることもに、やっぱり批評者になることも大事ではないか。教育者はある意味での批評者にならないければならないのじゃないか、と思うわけです。ところで、しゃべっているうちに時間もきましたので、この辺で打ち切りしたいと思います。結論らしい結論も出てはいないわけですが、けれども、こうした種類の座談会は「時報」でも始めてのことでもあり、いわば現在の学園における最も重要な学生運動についての模索的探求という位のことには出来たかと思えます。問題が問題であるだけに、各方面からの批判も出ると思いますけれども、こうしたものがきっかけとなって、学生問題に対するさまざまな意見が出てき、学園全体が創造的活力を生み出すようになれば幸だと思っております。では御苦勞様でした。